

学位請求論文審査の要旨

報告番号 甲 第 号

論文題目 〈漂泊〉と〈定住〉の交響史——四国遍路のクロス・ナラティブ研究——

氏名 後藤一樹

審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員
社会学修士 岡原正幸

副査 慶應義塾大学文学部教授 社会学研究科委員
文学修士 浜日出夫

副査 亜細亜大学都市創造学部教授 慶應義塾大学名誉教授
博士（社会学） 有末 賢

0 本論文について

本論文は、「現時充足的」な「共時性」を介した人々の交感のありよう「交響」（真木悠介）を焦点化しつつ、遍路や地域住民の「具体的、歴史的、個性的な諸個人」の生活史を、聞き取り調査によって詳細に検討しながら、四国遍路におけるそうした諸個人の「関係」を、フィールド調査の継続的实施によって明らかにしていくものである。本研究は、家庭・職場・地域における人間関係を基盤とした定住生活から一時的に縁を切って四国遍路を漂泊する遍路（巡礼者）の経験と、その過程で遍路が会える四国の地域住民や他の遍路との語り・物語の交わり、すなわちクロス・ナラティブズを、聞き取り調査や映像社会学的調査の実施によって検討したものである。

2013年から2017年まで継続的に行われた調査によって、聞き取り対象者は100名以上となり、本論文に登場する主要な人物たちの生活史を著者は聞き取り、オーラル・ヒストリー研究の視座から、それらを分析している。著者自身が全長1200kmにわたる四国四県の遍路道を隈なく歩きながら、ビデオカメラに記録した映像民族誌的データの蓄積は、遍路や地域住民らの四国遍路における交わりの具体的ありようを分析するために活用された。

本研究を特徴づける「クロス・ナラティブズ」については著者からの引用をまず記しておく。

基本的な意味は、複数のナラティブの共時的交差のことであり、そこには、「生きられる共時性」や「交響」の概念が込められているが、その派生系として、「語り手」同士の相互行為の経験に「聞き手」である筆者の経験が交差していく、三者関係におけるナラティブの交わりがある。(21頁)

本論文は、300 ページに迫り 25 万字を超える大作となっている。また公開審査会で上映された映像モノグラフ『四国遍路 人生の交差する道』（30 分 カラー 監督後藤一樹）も研究の一部である。

I 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

序論

1. 問題の所在——四国遍路を生きる人々の生活史の交わりの解明へ向けて
2. 研究の対象——共同体と共同体の間に構築される四国遍路
3. 研究の主題——漂泊と定住の交響史
4. 研究の方法——対話という出来事の中で交差する複数の語り・物語

第1章 漂泊の果てに——ある歩き遍路の生活史と私

1. お大師さんの声
2. 四国遍路から福島第一原発までの道程
3. Bさんの戦後史
4. 四国遍路のパフォーマティヴィティ

第2章 定住とお接待と——ある地域住民の生活史と私

1. 遍路と地域住民のまなざしの交差する四国遍路
2. 少年時代の暮らしと遍路との交流
3. 国鉄での旅客業務
4. 退職後のお接待の日々
5. Bさんを追いかけて福島へ
6. Aさんの仏教観とドラマトゥルギー

第3章 四国遍路のポリフォニー——生きられる亡き人

1. 聖なる時間の住人
2. 「Dさん」と「私」と「もう一人」のライフストーリー
3. 長い坂の上の長い対話
4. 時間の旅人

第4章 若者遍路の縁起こし——交響する三者の人生

1. 進むべき道
2. 三者関係の遠近法
3. 三者関係のクロス・ナラティブズ

4. 「もしもの人生」と「可能な人生」

第5章 終わりなき遍路——定住する流動（Ⅰ）

1. Jさんのテントで寝る家
2. 家をとるか、結婚をとるか
3. 瞑想と遍路
4. 「漂流」と「流動」
5. コンサマトリーな交換行為
6. 終わりなき交差
7. 交換行為という関係イメージ

第6章 四国遍路の共時性とその後——定住する流動（Ⅱ）

1. Kさんの自給エネルギーの家
2. 巡礼としての講演めぐり
3. 遍路になり、大工になる
4. サイト・スペシフィックな偶然の共時性
5. 漂泊と定住の関係としての政治

第7章 四国遍路における関係イメージの生成——移動と対話の映像社会学的調査の経験

1. 映像社会学の基本的問題
2. 再帰的關係イメージ
3. 1200kmの移動と対話の経験
4. 私にとっての四国遍路の現れ

結論

1. 本稿の概括
2. 〈裸〉と〈鎧〉——「縁切り」と「縁起こし」の弁証法

謝辞

文献

Ⅱ 本論文の概要

序論は、1. 問題の所在——四国遍路を生きる人々の生活史の交わりの解明へ向けて、2. 研究の対象——共同体と共同体の間に構築される四国遍路、3. 研究の主題——漂泊と定住の交響史、4. 研究の方法——対話という出来事の中で交差する複数の語り・物語、以上の四つの節により構成され、1では、遍路研究に関する先行研究の紹介、2では、遍路と地域住民は今日、後期近代に顕著なモビリティの増大という社会状況に規定されながら、共同体と共同体の間に構築される無縁の領域で、遍路と地域住民が物や

財を交換し合い、対話をしていることへの着目の必要性、3では、「漂泊と定住の交響史」を主題にする場合に想定されるパタンの析出を行い、以下のような四つの理念型を提示する。

- (I) 遍路の「漂泊」の行為と地域住民の「定住」の行為の交響
- (II) 遍路同士の「漂泊」の行為の交響
- (III) 遍路の人生における「漂泊」の経験と「定住」の経験の交わりの歴史
- (IV) 地域住民の人生における「定住」の経験と「漂泊」の経験の交わりの歴史

4では、四国遍路に集う人々の生活史を対象に、オーラル・ヒストリー研究を展開するアプローチにおいて、出会いと対話がなされる四国遍路の「空間の相」および、それを生きる人々の人生の「時間の相」を対象にしつつ、ポリフォニックおよびナラティブに把握する手法の必要性を、オーラル・ヒストリー研究の歴史を概観しながら、独自に「クロス・ナラティブズ」(先述)というアイデアを提示する。

第1章「漂泊の果てに——ある歩き遍路の生活史と私」、では、遍路Bさんの生活史と、それとかわり合う住民Aさんと私(著者)の経験が描写される。Bさんは、彼を迎える四国の住民や遍路道で出会う他の遍路のまなざしに応じて、自己を「パフォーマティブ」(Butler)に再構築し、私(著者)が参入することで結ばれた住民Aさんと遍路Bさんとの「三者関係」の相互行為も、四国遍路におけるパフォーマンス上演として理解される。『同行二人』の本当の意味は、『他人が見てくれよう自分』と『ほんまの自分』が二人で歩きようねん。ほじゃけん、鏡つこうて、みんな演技するん」。つまり四国遍路では、凝固している社会的カテゴリーを「行為」によって柔軟に作り変えていくことができる。その際、再構築される社会関係のあり方に、「不自由」で「不平等」な既存の社会関係を組み換える萌芽が含まれている、と考え得る。

第2章「定住とお接待と——ある地域住民の生活史と私」では、男性住民Aさん(遍路Bさんと私の関係をとってもっていた人)の生活史を検証しながら、お接待という「対話的な出来事」を、Aさんの語りを対象にして分析する。幼少期から現在に至るまでの数々のお接待の場面を、Aさんが克明に語る時、彼の語りのなかでは、複数の人間の声と行為が交わっている。そこで著者は、語りを〈絵画的〉に図示する〈クロス・ナラティブ表記〉を考案して、Aさんの語りを検証する。〈クロス・ナラティブ表記〉は、複数のアクターによる対話や相互行為の進行を示すことで、「対話という出来事」のプロットを探究する表現形式である。お接待という「対話的な出来事」は、遍路と住民のどちらが欠けても成立しない、そこでは必ず、複数のアクターのナラティブが交わる。四国遍路での人間同士の交流を語るAさんは、人と人との関係を媒介する〈隠れた第三者〉としての「仏」の役割を示唆した。「仏」は、人と人との相互行為や交換行為を媒介しているのだが、「私」や「あなた」や「彼・彼女」の俗な視点からは、それらを括弧に入れない限り、見えない次元で働いている力のことである。前近代において「仏」が表象していた力は、近代以降、社会学によって「社会的力」と呼ばれるようになる。「仏」のまなざしは、他者との関わりを内化した自己の行為を、Aさんの言う「客観的に見る」ような対自的な視点、すなわち、社会学的なドラマトゥルギーの視点とも重なる。

第3章「四国遍路のポリフォニー——生きられる亡き人」では、まず、第1節では、四国遍路のポリフ

オニーが、理念としての複数の声の対立を志向しておらず、複数の時間性の共存によって生成してくる多声であることが論じられる。四国遍路は、〈聖なる時間〉の物語を、現在の時間と結びつけて現実化する営みであり、それは、亡き人に向かって祈ること、想起された亡き人と共に歩くこと、亡き人の物語を他者に語ることなどである。第2節と第3節では、遍路Dさんと私、そして両者を媒介していた「もう一人」のあいだの三者関係の変容について論じられる。〈聖なる時間〉の住人と日々を生きてきたDさんは、〈聖〉と〈俗〉の二つの時間を行き来する旅人である。Dさんは、四国遍路で濃密に現れてくる〈聖なる時間〉のなかを、亡くなった彼女の息子と旅することで、まず彼女自身を救った。次にDさんは、彼女と同じように世俗から切り離されて彼岸の領域に入ってくる人々を、遍路道や電話相談などで助けていた。〈聖なる時間〉を旅した者は、此岸の領域に帰還してもなお、そうした時間が日常の時間とより合わさっていることを知る。

第4章「若者遍路の縁起こし——交響する三者の人生」では、それぞれに進むべき道を四国遍路で模索していた遍路Hさん、遍路Jさん、私（著者）の三者間の相互行為を検証することで、若者遍路の「縁起こし」について考察される。2015年7月、著者（私）は香川県の善根宿（遍路を無料で宿泊させる民家等の宿）で、通し打ち遍路をしていた男性遍路Hさんや男性遍路Jさんと出会い、彼らと共に歩きながら、その様子をビデオカメラで撮影する。彼らは「はなす」ことと「きく」ことを交互におこないながら、それぞれの人生を想像的に解釈し、それを直感的に理解しえる自己の人生に重ね合わせて、自身に「近い」物語に作りかえる。他者の物語を想像的に追体験することで立ち現れてくる人生を「もしもの人生」、直感的に観取される自己の経験にそれを重ねることで浮かび上がる人生を「可能な人生」と名付け、著者は、両者の相関関係の視座から、三人の旅における対話を分析する。このオートエスノグラフィックな分析では、社会的役割の固定化しやすい日常の領域で、人生の多様な選択肢を見失った若者たちが、四国遍路で、他者の「もしもの人生」を想像的に生き直し、そのことを介して自身の「可能な人生」と向き合う姿が描かれる。

第5章「終わりなき遍路——定住する流動（I）」では、Jさんの生活史における「定住」 - 「漂泊」 - 「定住」の過程を検証し、四国遍路を経たあとの「定住する流動」と呼べるような、彼のしなやかな生き方について考察される。四国遍路に赴く一年前、偏見と差別による共同体の排除の働きに絡めとられるかたちで、愛する女性との結婚を禁じられたJさんは、「家を捨てて、ほんとに結婚するか」と悩み抜いた。彼はこれを機に、それまでの実家での生活における役割を問い直した。著者は「漂泊」のあり方には二種類あるとして、「漂流」と「流動」という社会的に構築された生き方の差異を提起した。「漂流」が、共同体の不安定な周縁に留め置かれ、差別や搾取の対象として社会システムに組み込まれる状態の継続である一方、「流動」は、社会システムにおける固定的なポジションと主体を同定せずに、それを絶えずズラしていく動きの持続である。Jさんは、「定住する流動」を生きていた。Jさんは、愛媛県の宿で、宿の女将と、互いに見返りを求めることのない交換のやりとりをおこない、感銘を受けた。「目的なき行為」ができるのは、「今ここ」の人間同士の交流が、それじたい充実した喜びとして生きられているからであった。Jさんは

今、北海道で、その地を訪れる旅人に、自身の農業の成果物である食べ物や古民家の寝床を無償で提供し、旅人からは旅の話聞かせてもらうといった、自由で直接的な交換の場をつくるために、古民家の改修に着手している。

第6章「四国遍路の共時性とその後——定住する流動（Ⅱ）」では、四国遍路における K さんの「共時性」の体験が、いかにして彼女の人生を導いていったのかについて論じられる。K さんは、2011 年の東日本大震災と福島原発の事故を機に、福島県から故郷の岡山県に移住避難をした。K さんは、自身の原発避難について語ったこれまでの 250 回の講演会を、「八十八ヶ所、巡っているようなつもりで」おこなってきた。遍路道を歩いていた K さんは、高知の街なかで、「丸太が山から運ばれてきて積んである」のを目撃する。この時、丸太にたずさわる「もしもの人生」と「この感じ、すごく好き」という彼女自身の直感が共時的に交差した。すると、「ふと『大工になりたい』っていう、すごい強烈な思いが、ドンって自分の中に飛び込んできた」という。こうして相対化されていったのは、「女性で大工になる選択肢が、自分の中になかった」ような「世界」の自明の前提であった。彼女はその後、福島県で大工になり、震災と原発事故を経験し、現在、移住避難先の岡山県で、様々な社会問題の解決に取り組んでいる。K さんは、原発避難者や市民の有志と市民団体を立ち上げ、岡山に移住してくる避難者を支援する活動をおこなうなど、「漂泊」と「定住」の両視点を生かした社会活動を展開している。

第7章「四国遍路における関係イメージの生成——移動と対話の映像社会学的調査の経験」では、私（著者）の視点・カメラ・身体・感情・思考によって捉えられた四国遍路における交響のありようを、撮影された映像の「関係イメージ」の分析を通して、自己再帰的に考察している。2016 年 8 月 5 日から 9 月 21 日までの 48 日間、著者は四国八十八ヶ所寺院を通して歩いて巡拝し、およそ 1200km の移動経験を包括的に撮影した。今までの章で主題的に扱われた人の他に、S,Q,U,X,Y,Z との関わりが描かれる。著者は「四国の遍路道を自身の身体で歩いたのは、人々の顔に刻まれた人生を見つめるため、それらの顔が響かせている複数の声を聞くためであった。それぞれの人生の交差が、曼荼羅のように社会を作っている。この漂泊と定住の交響史のなかに、たしかに私も生きているのだ」という。

結論「〈裸〉と〈鎧〉——「縁切り」と「縁起こし」の弁証法」では、本研究によって得られた知見を整理し、その現代的な意義を現代社会の問題を背景にして議論する。四国遍路は、共同体からの疎外によって、あるいは、「秩序」と「自己」との関わり方の脱自明化を自ら意志して、〈裸〉になりつつある、または〈裸〉になっている人々の交響体である。遍路道を〈裸〉になって歩いた彼・彼女らの語りとその人生からわかるのは、〈鎧〉の失効した〈裸〉に対してなされる優しさは、序列関係にもとづく利害、あるいは、なにか見返りをもらおうとする私的所有の原理にもとづく打算とは、「無縁」だということである。集団生活からおり、または競争に挫折して、世俗ではもっとも弱い主体とみなされるような人間が、遍路において偶然出会う人々との交響の体験を重ねると、世俗のどこでも生きられるような強い主体に生まれ変わるのである。世俗では、今生では、捨ててもいいと思われたような遍路の命は、このようにして生き直される。その命は、垂直に屹立する序列関係の一コマとして再び生きられるのではなく、四国遍路を経て世

俗に還つてもなお、四国遍路で体得した自由で平等な水平関係の一部として、他者との交響を通して生きられている。そうした実践は、世俗の分厚い社会的秩序によって阻まれることもあるが、彼・彼女らは、一歩一歩前進し、世俗の社会関係をその足もとから組み替えている。四国の地域住民もまた、共同体の秩序の維持と持続的な経済成長という自明性を、外部からやってくる遍路との交流を通して相対化していた。住民らの血縁や地縁、経済的縁の喪失経験は、遍路たちのそのような経験と響き合うことによって、それ以前よりもエンパワーされた新たな縁を紡ぎ出していた。

最後に著者は、後期近代社会においては、流動性の高まりによって、二十世紀型の家族関係や生産関係が根底から解体しているなか、現代社会の居場所として、共同体の果てでなされる人々の交響に期待を寄せる。

III 本論文の評価

評価点

1 「四国遍路」の研究として

著者は「四国遍路」の「歩き遍路」と地元の「お接待」を対象にして、数十人のインタビューを4年近くにわたって実施した。そして、巡礼者と地元の定住者たちのライフヒストリーを〈漂泊〉と〈定住〉という視点から考察し、クロス・ナラティブという新しい手法によって、「交響史」と名付けている。まず、「四国遍路」研究に今までなかったユニークな視点と方法を導入した功績は高く評価される。

また、遍路経験者の人生における退職、転職、離婚、死別、病気、出郷など四国遍路の「動機の語彙」に注目して、〈漂泊〉と〈定住〉、「縁切り」と「縁起こし」などの対になる概念によって整理し、分析するというライフヒストリーの構造主義的分析になっており、網野善彦、山口昌男、見田宗介（真木悠介）などの思想が下敷きになっている。ライフストーリー研究が桜井厚らを中心とする「対話的構築主義」の分析に偏向する傾向がある中で、もう一つの「ライフストーリー研究」を打ち出した功績は大きい。

単なる四国遍路研究の枠組みにとどまらず、高齢者の貧困、離婚や死別などの喪失体験、若者世代のフリーター問題、地域社会の過疎化の課題などを幅広く考察する研究となっている。アジールとしての四国遍路は1200年にわたって、各時代の不幸を映し出す鏡であったが、現代四国遍路のエスノグラフィである本論文は、現代社会の諸問題に、それらを生きる人々の生と真摯に向き合うことで取り組んでいる。興味深いのは、そうした個々の 이슈が、四国遍路の集まりの場で交わると、どのような仕方で各自の人生のうちで解決されていくのかを、本論文が明らかにしている点である。本論文によれば、「縁切り」や「無縁」（ともに網野善彦の用語）の積極的展開は、共同体の必然の領域から縁の切れた者同士の、偶然の出会いを介した現時充足的な交流・交感にもとづく、「語りの交わり」や「物語の交わり」を通してなされている。

家庭・職場・地域の共同体から縁を切る過程を辿ったそれぞれの難儀さの共通経験が、四国遍路の無縁の領域で対話を通して響き合い、新たな縁を起こしていく過程を明らかにしている。参入離脱が自由であ

り、かつ、主従関係からは解放されているという意味で平等な四国遍路の集合体は、見田宗介が夢見た「交響体」の構想や、柄谷行人が実現されなかったものとして語る「アソシエーション」の具現化されたものであり、四国遍路で現に生きられている社会関係であった。こうした社会関係の発見は、近代社会における共同体の解体の果てに建設される、自由で平等な社会関係を探求し続けてきた社会学にとって、非常に意義のあるものである

2 クロス・ナラティブズという手法について

著者が、自ら対象とする現象に沿う形で開発した表記法である。従来の口述史研究、オーラル・ヒストリー研究、ライフストーリー研究、ライフヒストリー研究では、調査者と調査協力者が一対一で対面して聞き取りを行うことを前提にしてきた。著者はこれに対して調査協力者が同時に複数いる状態での調査実践を指向し、調査協力者同士での対話的实践に、調査者が対話的に交差するという、独自のポジションを確立させる。それは特権的な解釈者を排し、人々の生の記録や表現である語りや物語、その生きられる歴史を対話的に協働することを目的とする。これは新たな視角を従来のライフストーリー研究などにもたらすもので画期的である。そして相互行為的实践としての語りを描き出す優れた手法である。

さらに、クロス・ナラティブという発想は、実在する三者関係に適用されるだけでなく、一人の話者の語りに登場する人物を主体化し、複数の行為主体による対話的な交わりとして具体化するという方向に利用される。これらは、語りの内容を「絵画的」(Bakhtin)に表現する手法であり、実際には、語りの戯曲的構造を、その具体的な様態のままに、戯曲的に記述するものである。それは、従来のライフストーリー研究の成果を改めてこの手法で書き変える可能性を示唆し、同一の資料から新たな知見を引き出す契機にもなる。この意味で、この手法の学問的な意義は計り知れない。もちろん、戯曲あるいは上演演劇としてエスノグラフィ調査を提示するパフォーマンス・エスノグラフィ、エスノシアターへの貢献は言うまでもなく、語りを素材にして行われるアートベース・リサーチ全般への貢献も大きく、その汎用性は計り知れない。

3 映像(社会学)について

著者はビデオカメラをもち、他の遍路者とともに(あるいは別に)、遍路の参与観察を行うわけだが、この際に撮影された膨大な映像資料の分析が本論文の基底にある。著者は映像社会学の目的を「ある具体的な社会空間における文脈依存的な相互行為のありようを包括的に記録した動画像データ、音声データに基づき、社会的現実の構築過程を微細に検証すること」とし、本研究での活用を、記録、表現(構築されたリアリティとしての映像)、共創(再帰的關係としての映像)に求めている。本論文に限定しても、伝統的なフィールドノートの記述によってだけでは再現できない、調査対象者の表情、身振り、行為や語り、それらのなされた空間の具象性、調査対象者たちの相互行為、それに関わっていく調査者自身の行為等の動的なプロセスを、ビデオカメラに記録された映像をもとに論文内に分厚く記述し、それらを分析する手法を編み出したことの意義は大きい。映像資料の活用やその表現スタイルは我が国の社会学領域において十分

に検討されておらず、それは「映像の社会学」にとどまり、映像社会学にはなりえていないのが現状である。映像を利用した本研究はその現状を打破する一石となることは間違いない。特に第7章では映画作品の文章への置換作業とその分析が、あえて写真すら掲載せず実験的に行われたことは高く評価される。また本研究において本論文に並んで制作された映画『四国遍路 人生の交差する道』は、公開審査会で上映され、審査の対象ともしている（それは公開審査会での質疑応答を審査の対象に据えると同じ意味で）。映像社会学として作品化された映画、本論文、読者・鑑賞者による相乗的な解釈実践こそ、本研究の真骨頂と思われた。とはいえ、あえて映像や写真を伏せ、独立に執筆された本論文の意義は非常に高いものである。映像利用に関しての示唆的な方向性を多方面に提示することができており、その実験的かつ冒険的な取り組みの意義は著しい。

疑問点・問題点

1. 特権的な解釈者を排し、多様な言説や語りを、相互に交差するものとして、とりわけ、筆者自身の立ち位置もオートエスノグラフィ的に提示する複層的輻輳的な記述を行っているために、逆に筆者自身の立ち位置が不鮮明になるという部分が見られる。この点については、ポストモダン、ポストコロニアル的な状況にあっては、もっと真摯に考えぬくべきである。
2. 複数のナラティブの交響史を描き出そうとしたために、一人の人のライフヒストリーの〈厚み〉は犠牲になっている感がある。例えば、福島原発の事故と除染作業の仕事に就いた遍路Bさん、住民Aさんのライフヒストリーは、まだまだ未解明の部分が多いし、息子を亡くしている女性遍路Dさんや若い頃に世界を放浪し、ヨーロッパの国に住んでいた男性遍路Yさんなど、ライフヒストリーの〈厚み〉が欲しかった。
3. 映像資料の文章化は、実験的な試みがなされているとはいえ、映像そのものの衝撃力には届かないという指摘があった。映像の論文化に、たとえば会話のプロトコル化のような手法に近い手立てを講じるのか、それとも、映像と文章の存立平面を切断して組み合わせるのか、などなどの課題がある。ただしこの点については、学位請求について、論文のみではなく、映像作品などの提出を認めていく制度的な改革の方向性も指摘された。欧米圏の社会学分野では、かねてより、映像作品（あるいはその他の広義のアート作品）による学位取得が認められていることもあり、グローバル化の流れの中で、いかに各大学各研究科が対応していくかが問われることにもなる。

IV 審査結果

審査委員一同は、本論文がいくつかの課題を残しつつも、独創的な手法を提案し示唆的な成果を出していると認め、博士（社会学）を授与するに足る有意義な研究であると判断します。